

# 磐田総合病院 周産期医療センター

# 母子の安心安全担い10年

磐田市立総合病院(同市大久保)の周産期母子医療センター棟が1日、開設10周年を迎えた。中東遠地域で唯一の地域周産期母子医療センターとして、リスクの高い妊産婦や新生児に24時間365日体制で医療を提供し続けている。



10年間の歩みを振り返る(左から)白井副センター長、徳永センター長、瀬川看護師長。磐田市大久保の市立総合病院周産期母子医療センター

## 地域唯一、24時間体制

同センターは産科病棟と新生児特定集中治療室(NICU)からなる。1998年ごろから10年以上継続して年間分娩(ぶんべん)数が増え続けていた2010年3月1日、県や地域からの要望を受けオープンした。開設前は、早産や2500g未満の低出生体重児への治療は、産科小児科病棟の新生児室で対応していたが、保育器2台分のスペースに4台を置くなど設備に余裕がなく、感染症のリスク対策や面会時のプライバシー確保にも課題があった。現在、NICUには

保育器8台を設置し、小児科医や産科医、助産師含む看護師もほぼ倍増した。外来、産科、NICUの看護師計約50人を一括で管理することで、出産への不安など妊産婦の情報を共有し、切れ目のない支援も可能になったという。同センターの瀬川明子看護師長は「より良い出産のために、産後鬱(うつ)のケアや、中高生への思春期教育にも力を入れたい」と話す。

10年間で生まれた新生児は約9千人。白井真美副センター長は「開設当時の赤ちゃんが10歳になる。成長をずっと見守っていく」と笑顔を見せた。

関係者がそろそろ緊急時の訓練も年1回行うなどリスク管理も徹底する。徳永直樹センター長は「今後も安心安全な周産期医療を提供できるよう、技術と連携を向上していく」と意気込む。

(磐田支局・駒木千尋)